
短編集

片岡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集

【Nコード】

N3303Z

【作者名】

片岡

【あらすじ】

ジャンルも方向性もバラバラなものを無造作に詰め込んでいく予定。モバゲーやってた頃に公開していた作品もあります。

馬鹿だったり病んだり意味わからなかったり。

たまに著作権放棄のお題をお借りして好き勝手やってるかもしれません。

うごめく(前書き)

阿呆です。

うぐめく

“それ”は闇の中で虚空を見つめていた。そうして時たま、通り過ぎる人々を恨みの籠もった瞳で睨みつけては暗闇で蠢うごめいていた。

父を、殺された。次に母を、そして妹。果てには手に手を取り合っ
てようや々と共に逃げ延びてきた弟までもが、その凶刃にかかり、
尊い命を奪われた。

おれたちがいったい、何をした！

……そう、叫び出したい気持ちだった。が、少しでも目立つよう
な行動を取れば己も殺されてしまう。“それ”はぐっと堪えた。

だが、悔しい。

おれたちがいったい、何をした……？

其処に在るというだけで嫌われ、蔑まれ、命を奪われる。こんな
にも不条理なことが、果たしてあって良いのだろうか。

復讐、してやる。

そう、そうだ。復讐、復讐だ。復讐してやるのだ。家族の、仇を
取るのだ。

“それ”は駆けた。疾風の如く素早く駆けた。

「きゃああああ！」

絹を裂くような女の悲鳴。手には、禍々しい凶器。

またアレか！！

必死に逃れようとするも、時既に遅し。あの悪夢が、再び襲う。

徐々に動かなくなる手足。霞む視界。己の情けなさに、涙が出る。此処まで、か。

ああ、父上、母上、年端もいかぬ妹よ。最期まで己の身では無く、おれの身を案じた弟よ。仇はとれませんでした。もうすぐおれも、其方へ逝きます。

「もうやだあ！ どうしてこの家ってゴキブリがこんなに出るわけ！？」

かのじょ≠たいよう

この夏が終われば、きっと私の命は枯れ果てるのだわ。
張りのあるこの肌はしみだらけになってしわくちゃの老婆のよう
になるのだわ。

自慢の美しいこの黄金の髪は抜け落ちていくのだわ。

嫌。嫌よ、そんなの絶対に嫌だわ。

ああ、夏の太陽よ。燦々と私に降り注ぎなさい！
もっと！ もっとよ！

もっともっとと光をちょうだい！ もっと私を輝かせて！
そうよ。そうすれば、きっと私は一日でも長く彼の前で美しく咲
き誇ることが出来るのだわ！

ああ、ねえ、愛しい貴方。もっと私を見てちょうだいよ。そうす
れば、もっともっと、私、うんと美しく咲いてみせるわ。
この命を、咲かせてみせるわ。

ねえ、私を見て。

私は太陽の化身

（待って、私から目を逸らしちゃ嫌！）

（ずっと私を見ていて？）

（そうすれば、太陽なんかよりも優しい光で貴方を包んであげるわ）

学校もの詰め合わせ（前書き）

学校っぽい単語で。

学校もの詰め合わせ

“ おはよう ”

「おはよう愚民共！」

「え……、なにお前。殺されてーの？」

「お前、ちよつと金持ちだからって調子のんなよなー！！ くそつ、羨ましい！！！」

「ふはははは！ 所詮庶民には到達することの出来ない場所にぼくはいるのだよ！ さあ、崇め、称え、いであっ！？」

「ふあああっ……。……あれ……。……おれ、なんか踏んだ……。……？」

「「グッジョーブ！！」」

殺意にみなぎってる奴
村井むらい

羨ましがってる奴
赤城あかぎ

金持ちな奴
おくのみや
奥乃宮

踏んだ奴
さがさき
嵯峨崎

“遅刻”

「せんせー、おはようございまーす」

「はいはい、おそようございます。市田、今は昼だ。確実に早い時間じゃない」

「あらー……。遅刻しました。ごめんなさーい」

「素直でよろしい。で？ 遅れた理由は？」

「川で溺れてるお婆さん眺めてたら遅刻しましたー」

「助けるよ。誤魔化すための嘘にしてもそれは酷いだろう。先生はお前をそんな子に育てた覚えはありません」

「いっちゃんもせんせーに育てられた覚えはありません」

遅れた奴
いちだ
市田

担任のせんせー
たなか
田中

“迷子”

「あいつ、おっせーなあ……」

「そろそろ行かなきゃいけない時間なんだけどね……」

「せっかくの修学旅行があいつのせいで台無しになるなんて、誠に遺憾である」

「ご立腹だねー……、椿さんは」

「すいませーん！ 道に迷いましたー！」

「遅いぞ、内山ー。お前のせいで椿がキレて先生はガクプルだった。罰として其処にある噴水の周りを五十周」

「ええ！？ なんなんだその体育会系のノリ！」

「お前が迷ったのは道ではない。人生である」

「相変わらず椿は俺に酷い！」

困った奴

樋田

キレた奴

椿

迷った奴

内山

“居眠り”

「はい、じゃあ、この問題を嵯峨崎ー、解けー」

「せんせー、嵯峨崎は今ぐっすりおねんねタイムでーす」

「よーし、市田ー、叩き起こせー」

「いやでーす。いっちゃんの手が腫れちゃうでしょう」

「嵯峨崎ってそんな石頭だったっけか？」

「嵯峨崎、起きろ。先生はお前のせいで酷く困っておられる」

「ううーん……、おれ、なんだかとても眠いんだパトラッシュ」

「誰がパトラッシュか。殺されたいのか貴様」

「ぬあっ？」

「だいたい眠いとか嵯峨崎寝て……、うわあ……、そこまでやるう？」

「椿ー、お前のその心遣い、先生はとっても嬉しい。でもな、先生、蹴り起こせとは言っていない。脳天に踵落としするなんて嵯峨崎を殺す気か。椿はもうちょつと皆に優しくしてやろうなー」

「酷く足が痛む。何故だ」

「嵯峨崎の頭は椿の踵落としに打ち勝ったのか」

「誰かおれに消しゴム投げただろう。おれの眠りを妨げる者は何人たりとも赦さない」

「嵯峨崎お前頭可笑しいんじゃないのか」

嵯峨崎の頭は椿の踵落としの威力をもともしない。

人物紹介とか載せてたけど嵯峨崎と椿だけ覚えとけば問題ないと思う。

“ 授業妨害 ”

「えー、じゃあ、この式に当て嵌まる公式はなんでしょう。はい、嵯峨崎」

「先生、嵯峨崎また寝てるぜ」

「よーし、村井、叩き起こせ」

「無理だって。先生、こいつきつと何かの病気なんだ」

「仕方ない。じゃあ、秋澤、わかるか」

「先生！ 秋澤は手鏡に映る自分に夢中です！」

「よし、内山。その手鏡叩き割ってくれ」

「俺じゃ無理だ！ 嵯峨崎の頭に任せましょう！ えいつ」

「ほ、本当に割れた……。嵯峨崎くん、大丈夫かな……」

「微動だにしねーな」

「こいつ、実は寝てるんじゃないかって死んでるんじゃないのか」

「あああああ！！ なんてことすんだよ内山！！」

「だって先生が叩き割れって」

「嵯峨崎もだが、秋澤、お前はいったい何のために学校来てんだ？」

「勿論美しいオレを愛でるために決まってんじゃないスカー。勉学に励むオレヤバくね？ マジばねえ」

「……は、励んでないと思う……。つあ、ご、ごめんなさいっ……」

「秋澤、お前帰れ」

心配してた奴
とりこえ
鳥越

ナルシーな奴
あきさわ
秋澤

“抜き打ち”

「この間やった抜き打ちテストのことだけどな、正直、ほんとに最悪だった」

「いきなり抜き打ちとかやるせんせーが最悪だと思ったー」

「市田、お前廊下に立つか？」

「冗談でーす」

「で、話を戻すが……、なんだ平均点30点って。舐めてんのか」

「先生ぺろぺろしたって不味いだけだろ？」

「内山、お前そろそろ本気でどつくぞ」

「私は先生ならぺろぺろできる」

「椿、正気に戻れ。それでまた話を戻すが、このクラスでまともな点を取れたのは鳥越と椿と真崎、この三人しかいない」

「へー、真崎もか。すごいな」

「えっ？ 滅茶苦茶簡単だったよ。ねえ、鳥越さん」

「えっ……、う、うん。簡単だった」

「あの程度で難問とは笑わせる」

「お前らちょっと殴らせて」

「とうかな、大体可笑しいだろ。なんでテストを開始した直後に過半数の奴が机に伏せるんだよ。少しは努力しろ。嵯峨崎に至っては名前すら書いていない。真っ白な回答紙が手元に届いたときは先生、目が飛び出るかと思った」

「な、名前書いてないのに、わかったんですか……？」

「名前を書く欄に、“眠い” って書いてあった。記入してあったのはそこだけだった」

秀才しやうたう そうな奴
真崎

“ 居眠り 2 ”

「——で、この公式を此処に当て嵌めて……、」

「 $x \parallel 2$ 、 $y \parallel 4$ 。これを代入すると……」

「——ということだ。つまり……」

「——であるからして、このように証明出来るわけだな。
えー……、」

「……そろそろお前ら起きろ」

クラス全員でハイパーおねんねタイム

“授業妨害 2”

「少しよろしいですか、田中先生」

「鬼頭先生、よろしいですけどいったい何処から入ってきてんだア
ンタ」

「え？ やだなあ、窓からに決まってるでしょう？ 見てたじゃないですか」

「そんな爽やかな笑顔で言われても。此処が何階だかご存知ですか？」

「四階ですよ？」

「ですよじゃねーよ」

「そんなことより前の時間でこの教室に教材を置き忘れてしまつて……、あ、あったあった。早く理科室に戻らなくっちゃ」

「どうして鬼頭せんせい二階にある理科室からわざわざ校舎の壁を伝つてこの教室に來たんだらうねー」

「ちょっとしたチャレンジです」

「今すぐ捨てろ。その無駄なチャレンジ精神を」

チャレンジヤーなせんせい
鬼頭

“図書室”

「あ、あのっ……、赤城くん、図書室は飲食禁止で……」

「えー、別に良いじゃんか鳥越ー。腹減つたんだもん。仕方ないだろー」

「で、でも……、」

「あ、やべっ。コーラ溢した」

「——ッ!! テメエええええ!! そこに直れえええええ!!」

「ええええええええ!?!」

「図書室は飲食禁止だっつってんだろぅが!! その汚れた本を修復するのにいったいどれくらいの時間がかかると思っやがる!! 一日だ……!!」

「た、たった一日じゃんか!」

「その一日でどれくらいの本が整理出来るんだろぅなあ!?!」

「う……っ!」

「誠心誠意土下座しろ!! 三回まわってワンと言ええええええ!!」

「ううう……。(ぐるぐるぐる)……わんっ」

「あれ、椿、鳥越に姉か妹なんていたっけか?」

「いや、あれは鳥越です」

「鳥越は二重人格なのか」

いつも内気な鳥越さんは本に命かけてる

“説教”

「いやゝ、相変わらず田中先生の請け持つ椿と鳥越と真崎の三人はとても優秀な生徒ですなあ」

「はは、有難う御座います」

「これも偏ひとえに田中先生の教育の賜物でしょうな！」

「いえいえ、そんなことは……、」

「ですが……、その他の生徒の成績が少し……」

「……………」

「三ヶ月待ちましょう。その間に彼らの成績を上げることができなければ、クビも覚悟して下さいね」

「マジでか……」

果たして校長に教員をクビに出来る権限があるのか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3303z/>

短編集

2011年12月27日01時56分発行